

対岸の華事 中国 WATCHING



在日中国人女性が外から祖国を見る



今月の Topics 東日本大震災に対する中国社会の反応

『日本国民の冷静さに驚嘆』

震災後、中国のあらゆる報道やインターネットで一番多かったのは、日本国民の行動に感嘆する声でした。日本を襲った未曾有の大地震と大津波を前に、整然と秩序を保つ日本国民の冷静さに感動し、尊敬に値すると賛辞を惜しみませんでした。

残念ながら震災直後には、日中の歴史から来る反日感情を抱く一部の中国人による日本の被災を喜ぶ書き込みなども見られましたが、すぐに良識ある大多数のネットユーザーによって批判され、その後は日本国民を称賛する大合唱になりました。

その時、よく目にしたのは「**淡定**」(落ち着いている様子)という言葉でした。

ここで幾つか今回よく引用された東京在住の中国人のブログを紹介します：

「東京の町中が、歩いて帰宅する人で溢れています。数百万人が一斉に街頭に出てきたような状態ですが、みんな自主的に整列して黙々と前へ進みます。騒ぎも一切見られませんでした。私は車で移動しましたが、渋滞が酷くてもクラクションを鳴らす人は皆無でした。目の前のすべては、まるで巨大なサイレント映画のシーンが流れているようでした。」

「何百人もが広場に避難しました。その間、誰一人タバコを吸ったりしませんでした。その職員たちだけは忙しく走り回って、ブランケットやお水、クッキーなどを全員に分け与えていました。また、男性たちは女性のために、ビルに物を取りに戻ったり、電源を引いてラジオを点けたりなどしていました。みんながそこを離れた数時間後、地面にはゴミ一つ落ちていませんでした。」

「公衆電話だけが通じるようになると、電話会社が直ちに自動的に無料へと切り替えました。寒空の下、帰宅難民が公衆電話の前で長い行列を作りました。恐怖を味わった直後誰もがやっと連絡のついた家族や友人に話したい事はいっぱいあったはずですが、すべての人が後続の他人を気遣い、短く用件を伝え、そそくさと通話を切り上げて行き



ました。」

これらの内容は広く中国国内で紹介され、中国の皆さんは以下のような反応をしています：

「以上のような行動は、日本人からすれば当たり前のようではあるが、普段から自己中心的な中国人にはこんな生命を失うかもしれない恐怖の中、到底無理な要求になるでしょう。中国人は日本国民の行動に感心させられたと同時に、自分たちの情けなさにも落胆させられました。」

「日本人は常に黙ってやるべきことをやるが、中国人はまず大々的にスローガンを打ち立ててからでないと動けません。日本人は冷静な狼、中国人はやたらと動き回る羊です。」

「未曾有の震災によって両国民性の違いが浮き彫りとなりました。万が一、両国が再度戦火を交えることになっても、我々は日本人に勝てるなどと思わない方が良くもありません。」



『日本文化に由来する悲劇に対する独特の深層意識』

過激なコメントと思われるかもしれませんが、この震災を通して、日中両国民の力の差を目の当たりにして、中国社会が危機感を覚えたのは紛れもない事実と言えます。震災を受けた日本人が冷静に行動している一方で、中国では放射能恐怖からパニックが起こり、塩の買い占め現象にまで発展しました。

中国人は往々にして自分たちは優秀な民族と自負していますが、今回ばかりは歴然と差を見せ付けられ、意気消沈となってしまいました。そこで、皆さんそろってその原因究明に躍起になっています。

「大災害を前に、他国民の目からは異常とも言える日本人の行動は、日本社会の組織能力の高さの故でしょう。また、国民が暗黙のルールによって呼吸の合った行動を取れるのも、国家に内在する実力といえます。しかし、この落ち着き慌てず、整然と秩序立って行動する国民性は生まれつきというより、過酷な自然の中で生きる民族の世代を超えた積み重ねによるものです。このような悲劇に対する意識は、内に秘められる深層意識のような民族性に根ざしています。更に、この意識が日々進歩し、少しもいい加減にしないレベルに進化した必然的な結果として、非常時に対する精神的・物質的準備が備わったといえます。」

「突発的な災難や生き別れ・死に別れに際し、日本人の感情の示し方は他の国とは大いに異なります。そういうとき、他の国民は往々にして胸をたたき地団駄を踏む、または



天に叫び地を打ち叩くようにして、悲しみのあまり自らの死すら願う場面がよく見られますが、日本人は逆にとても冷静です。驚いて度を失ったり大声で泣き叫んだりする場面がめったにありません。涙をこらえる場面が多く、むしろ仕方がないと達観したり、黙って受け止めるような表情が多く見られます。これは日本人が感情に乏しいということではなく、彼らの感情や文化に悲劇的要素があまりに多く沈殿している事に由来しています。」



「日本の社会文化は感情を表に出すのを好まない習慣があります。例えば日本の俳優さんは感情表現を非常に控え目に演じます。典型的なのは高倉健のような演技: 出かかった言葉は口に抑え戻し、こぼれそうな涙は流れることなく飲み込んで、すべて腹に押し込んで回収します。でもその結果、あの控えめな表情から、余すところなく気持ちは伝わります。」

「日本人の文化は be の文化、即ち受動的、そのため、自然に逆らわず順応して存在する文化として今日に至ります。その一方、欧米文化は do の文化、能動的で自分で切り開くような攻撃性が含まれます。最近の中国は欧米に近いと言えるかも知れません。」

『政府を信じる日本人、疑う中国人』

「日本国民が落ち着いていられるのは、根底には政府に対する絶対的な信頼があるからです。震災後、国民は政府や関係団体が公開するあらゆる情報を信じ、また政府の呼びかけを徹底的に守り通します。放射能が人体に危害を及ぼさないという当局の説明に、最初から疑おうという神経は毛頭ありません。当局が、外出を控えテレビ等を通じて屋内で情報収集するように勧告した時も、多くの人は掛け値なしにそれを信じて遂行していました。巷に出て三々五々群れをなしては裏情報を集めたりデマを流したりする人は皆無のようでした。」

「日本国民の政府に対する信頼の厚さをまざまざと見せられ、きっと中国の役人たちは秘かに日本の同業者に羨望のまなざしを送っていたに違いありません。」

「日本の首相の交替頻度は世界一と言っても過言ではありませんが、それは選挙民の政府に対する不満の表れでもあります。しかし、以前の自民党政府に対しても、現在の民主党政府に対しても、国民は政府に騙され、愚弄され、または蔑ろにされていると疑う人がほとんどいません。それは日本政府が一貫してマスコミや国民に対し、誠実かつ平等で信頼のおける態度で接してきた賜物と言えましょう。他人に対する信頼は、その人の能力や犯したミスに影響されるものではなく、誠心誠意尽くす姿勢や傲慢でない態度により生まれるものです。」

「日本人は健全な社会福祉制度に守られ、地震津波など災難に遭っても政府は必ず補償してくれると信じているので、安心感を持っています。中国人はこのような安心感はず

持ち合わせていません。歴史を観ても分かるように、中国人は往々にして家族や親戚に頼って避難し災難を乗り越えます。そのため、災難に際した場合、中国人が本能的に示す第一反応は自分で何とか自身を守り災難から逃れることです。日本人と同様な秩序を中国人に求めるのは、無理に決まっているでしょう。」

『余談 映画「唐山大地震—思い続けた 32 年」にまつわる話』



中国映画として去年国内で史上最高のヒットを記録した同作は、1976 年 7 月 28 日に河北省唐山市で起こったマグニチュード 7.8 の直下型地震と被災者一家のその後の運命を描いたものです。因みに、この地震では、死者 24 万人、重傷者 16 万人、震災孤児 4200 人以上という未曾有の被害を出しました。

この映画は「催涙弾」と呼ばれ、公開二ヶ月の興行収入は 6 億元(約 75 億円)超えの驚異的な数字を叩き出しています。当初は今年の中頃日本でも公開される予定で、3 月 11 日夕方には九段会館大ホールにて試写会が開催されるはずだったのですが、地震による天井崩落などで急遽中止となりました。従って、映画のロードショーも無期限に延期となりました。

